
Waltz of Pistol ~ 銀の覇者 ~

柳野菜奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Waltz of Pistol ～銀の覇者～

【Nコード】

N1510Y

【作者名】

柳野菜奈

【あらすじ】

2253年、黒世界革新と呼ばれる大事件から半年。霞樓の親、楠木家について調べるために、黒世界とまたかかわることになる。

楠木家は【銀の覇者】という日本最古の殺屋だった。

半年ぶりの黒世界へ（前書き）

Waltz of Pistol の続編になります。

前作を読んでいない方は、必ず前作をすべて読んでからこちらを読んでください。

半年ぶりの黒世界へ

「隆哉くん、朝だよ。起きて」

霞榎は布団の中で丸まって寝ている隆哉にやさしく声をかけた。

「ん…霞榎？」

「おはよう。」

まだ寝ぼけている隆哉に笑いかける。

「今日ね、【レヴァンス】に行こうと思うの」

その一言で、隆哉の目が少しだけ七海に戻った。

2253年、「黒世界革新」と呼ばれる七海たちの大事件から半年。白世界で、2人だけで生き始めた霞榎と隆哉は、治安のいい飛島市に住んでいた。霞榎は、大けがを負った隆哉を看護しながら、大学へ通っている。

しかし、思うことがあった。

本当の父母はどこにいるのか？

湯浅家の養女であることは理解していたが、楠木という姓を知って、改めて実の父母を知りたくなったのだ。

「楠木家っていうのは、日本で最初に殺屋を作った名門なんだ」
朝食の席で隆哉は口を開いた。

霞榎は思いだした。彼の両親はルイス・アンデルセンによって殺されてきたことを。

（いやな話題だったかな。）

しかし、隆哉は顔に出さず話を続けた。

「彼らが作った殺屋、それが【銀の覇者】という日本最古の殺屋だ」

「そこに行けば、私の親が見つかる？」

「かもしれない。わかんないけど、行ってみる価値はあるかもしれない。」

ひとまず、【レヴァンス】に話を聞いてみよう。オレらはもう黒世界の人間じゃないから、【レヴァンス】に連絡をとったほうがいい」

【レヴァンス】とくと 東都支部

午前9時ごろ、蓮見はすみは湯浅零泉ゆあざれいせんとの会議（始まったのは今朝4時ごろ）から帰ってきた。

「ボス、失礼します」

（帰ったとたんに仕事か）

最近少し、蓮見は仕事が嫌になっていた。その理由は、エースがいなくなったせい。今の【レヴァンス】の戦力では、熟せないようなレヴェルだった。

扉があいて、幹部の天野あまのが電話の子機を手に執務室に入ってきた。

「極秘回線に、七海から電話です」

「七海から？」

彼からこちらにかかわってきたのは、医者を紹介してくれ、と言ってきた半年前以来。なんだろうか。

「出るわ。」

古希を受け取ると、天野は出て行った。

「はい。蓮見はすみ鈴子れいこです」

「ボス、久しぶり。」

変わらず低いごろつく声が耳を刺激する。

「久しぶりね。体はどう？」

「もうほとんど…っと悪い、霞榎」

電話の向こうで何かあったようだ。大方、霞榎が椅子を差し出したんだろう。

「霞榎ちゃんも元気かしら？」

「はい。元気です。」

俺もほとんど治ってます。まあ、前ほどには動けないですけど」

10年越しに愛しい人と会えた二人は、仲よく暮らしているはずだ

ラブラブで。

「で、用件は？」

「明日、そちらへ向かいます」

思わぬことで、電話を落としそうになった。

「な、なんで？」

「…楠木について、いや、霞榎の両親について教えてほしいんです」

「【銀の覇者】か……」

日本における最古の殺屋。その情報については、黒世界の第1機密事項となっていて、白世界では全く手に入らない情報だ。

「いいでしょう。どこで会おう？」

「そっちへ行きます」

「あ、私は今、東都にいるの。来週まで青葉市せいようには戻らないよ。」

東都は青葉から南東に50？以上ある大都会。

しかし、現代のコミュニーターでは1時間もかからないで移動できる距離だ。

「東都？まあ、こっちからお願ひしてますから、行きます。」

どこか、レストランとか知りませんか？怪しまれないところで会いましょう」

「怪しまれないところ…というのがここが」
指定した日、指定された時間に、指定された場所へ来たのだが、その場所というのが

レストラン〈雨宿り〉(UN ABRRI) >

200年以上、東都で店を構える老舗フレンチ。3つ星レストランだ。

服装も、ドレスコードが必要だった。

隆哉はヒットマン時代のスーツ、霞榎は令嬢時代のドレスを着た。

「蓮見さんらしいね。行こう」

入って、ウェイターの案内を受けると、先方はすでに座っていた。

「久しぶり。元気そうね」

「おかげさまで」

2人で席に座ると、蓮見はウェイターに合図した。メニューは決めてあるようだ。

「こんなところ…絶対高いでしょう。」

蓮見さん、お金ありますか？」

「もちろんあるわよ。」

言っておくけど、私はお金を気にする男は嫌いよ？

今まで稼ぎ頭だったのだから、お金には困ってないはずだけど？」

「まあ、そうですね」

「情報提供料はいただく予定だからね」

「はい。もちろんです」

1品目が運ばれてきた。オードブルのオムレツのようだ。(隆哉は食べ物に詳しくない)

「フランス産の茸ですね。ムースロンでしょうか」

霞榎は、令嬢だけあって食の文化にも詳しい。ちよつとだけ、家柄の差を感じた。

「話し始めてもいいかしら？」

スタートの合図を聞いて、手を休めた。

「今、【銀の覇者】は、ある1つの依頼人クライアントだけと接しているわ」
1つ、というのが不可解な表現だった。

「その依頼人は<世界政府 DIAMOND - >の日本支部」

「では、政府専属ともいえるのですか」

政府の信用を得ているのだから、それなりに強いのだろう。

「ええ。」

<レヴァンス>はもう政府専属でないけど
それは初耳だ。

隆哉が脱退してからいろいろ変動があつたようだ。

「専属だつた時も、最高ランク・Sランクの任務の多くは、こちらに回さないで、【銀の覇者】に回していたようね。」

蓮見がグラスに手を伸ばす。グラスの中には、ワインが入っている。話に区切りがついたので、食を進める。

あまり食べたことのない茸のようだ。

「霞榎、これなんだ？」

オムレツの中の茶色い物体（食べ物だ）を訊いてみる。

「それ、トリュフよ。」

最近は人口で作っていることもあるようだけど、きっとこれは天然ね。

今、ヨーロッパは汚染区域（18年前のウイルス事故による影響）に設定されているところがほとんどだから、フランス産ではないと思っけど」

「へえ。」

「何も知らないのね」

蓮見さんに笑われた。

霞榎は、最近こんな事ばかりなので慣れてきたようだ。

少し不貞腐れて、食べ進める。

笑われるだろうから、謎の物体があっても無視して口に放り込んだ。

「あの」

オードブルがほとんど処理されたころ、霞榎が口を開いた。

「私の両親についてはわかりませんか？」

蓮見は首を横に振った。

「楠木の家系については、まったくデータが出回っていないの。

この前、第1機密事項といったでしょう。あれは、黒世界の中でも通用していて、こちらでもあまり詮索する人はいないわ。」

「そうですか……」

「彼らに会って話すしかないと思うわ。

連絡先は、湯浅家にあるはず。零泉さまに訊いてみて」

「はい」

オムレツを食べ終えて、スープが運ばれてきた。

「栗のスープね」

「シャテーニユでしょうか。フランス原産の栗ですが、今は日本で人工栽培されていると思います。昔とほとんど変わらないそうです。冷製スープなので、猫舌の隆哉でもすぐに食べ始められた。

「【銀の覇者】といえば」

思いついたことがあって隆哉は口を開いた。

「紅桜が一戦交わったことがありましたよね。確か、2年半前でした」

蓮見は少し考えた素振りでも口を開いた。

「そうだったわね。2年前の3月だったかしら。

second son / 楠木武蔵くすのぎむさしとかいう4刀流の剣士だったわ」

「はい。

あいつの記念すべき1敗目で、負けたのは後にも先にもあれきりでした」

「え、一度だけ？」

霞榎が驚いたのにも納得がいく。本当に、彼の戦績には恐れ入る。

「その彼がね、最近道場へ通い始めたの」

「へえ。独学で学んでいたのに、どこかの流派に入るつもりなのか」
意外だった。何にも囚われずに、ただ只管刀を振るってきた紅桜が
教えを乞うなど。

「まあ、実戦が減って暇しているようなね。」

それで、そんな強い紅桜を倒すほどの剣士がいるのだから、銃士も

それなりの力があると考えていいでしょう。

バトル・パワー
戦闘力は七海よりは下だと思っけどね」

さらりと、忌まわしい昔の名前を使われて、少しギクツとした。

サラダとパンが運ばれてくる。南瓜のサラダとチーズのブルスケツタ。

「あの、【アポリア】で聞いたんですけど」

霞樓は一度フォークとナイフを置いて口を開いた。

「マザーの名前、蓮見佳代っていうんですね」

そんな話、知らなかった。

霞樓は、当時10歳で独自の情報網を確立していて、かなりの権力を放っていた。だから、知っているのだろう。

蓮見は、ほとんど変わらぬポーカークフェイスだったが、腕に力が入っているのがわかった。

「…ええ、そうよ。」

佳代さんは私の従姉です。

佳代さんは両親と一緒にイギリスへ行っていたの。もともと北ドイツ（80年ほど間に南北に分離した）に住んでいたのだけれど、汚染区域になって引越したの。

そして、ヒットマンの才能があった佳代さんとその2人の弟は、生計を立てるために【ANCHOR】^{アンカー}に所属していたわ

「弟っていうのは蓮見遊季、^{はすみゆうき}遊大の双子ですよね」
「びったり息の合った彼らのバトルは有名だった。」

隆哉（いや、七海）が戦った時も40歳を超えているとは思えないパワーだった。

「ええ、そうよ。」

で、私が【レヴァンス】のボスに就任してすぐ、保護を求めてきたの。

【ANCHOR】から<LcooZ9304>を盗んだと言っの。
そして、日本でヒットマン養成所を作ると言っていた」

<Lc00Z9304>は嘗て隆哉が霞榎に飲ませた記憶喪失薬だ。ヒットマン養成所というのは、紛れもなく【アポリア】のことだろう。

「3人は【アポリア】を作った。」

蓮見はワイングラスを弄びながらぼつりと言った。

霞榎はそれに誘われて、怯えるようにワインを飲んだ。

「いままでに、日本国内だけでなく、国外の殺屋に、およそ180人のヒットマンを輩出しているわ」

【アポリア】は、誰にとってもあまり良い場所ではなかったようだ。強いヒットマンがある国だけに作り出すことが可能なら、その国でハイ・バトル・パワー高戦力を独占する可能性も出てくる。それは、黒世界の均衡を乱すきっかけになる。

魚料理が運ばれてきた。葉でつつんで蒸した白身魚のようだ。

「霞榎ちゃん、大学はどう？」

蓮見はかなり強引に流れを変えた。

「あの後、数日休んだ以外は何も変わりありません。」

実際、湯浅家ともなにも変化はないので、特に勘ぐられることもありません」

「でも遠くなつてでしょ？通学は大変じゃない？」

「いえ。ヒットマンとしての感覚が戻った今、あの街は殺気が満ちていて住みにくいですね。なので、引越しをしてよかったです」
事件の後、霞榎と隆哉は一緒に飛島市に移った。

その理由が、霞榎のそれと、【ANCHOR】や【Demon Kiss】の追手から逃げるためだった。なにしろ、ボスを殺したのだから、黒世界内でも憎まれて当然だ。

「白世界に移ったとはいえ、あなたたち、銃ピストルを携帯しているでしょう？」

隆哉は内心が揺れ、無表情になったが、霞榎はポーカーフェイスの微笑みを絶やさなかった。

パツと見、ドレスコードを守った2人に見えなくもないが、隆哉の

スーツの内側には鉄の塊が2つ、霞榎の太ももにはホルダーに入つた愛銃がある。
コルト・バインソン

「いま、私が2人を狙ったら、どちらが先に反応するかしらね」

「霞榎ですね」

迷わずに答えた。

「それはなぜ？」

「オレには、ブランクがあります。」

それに霞榎は、オレが持っていないものを持っています」

「ブランクは私のほうが長いけど」

「持っているもの？」

文句があるようだが、無視して問いに答える。

「素質です」

松沢家は、決してヒットマンの家系ではない。なので、隆哉は戦闘力のすべてを努力で構成している。

しかし一方で、楠木家は何百年と強いヒットマンの血が受け継がれている。

いくら、銃を持たない期間があつたとしても、失せることのない殺気を秘めている。

「霞榎の10年前の戦闘力は5932ポイント。」

オレは、当時3014ポイント。今は、努力して6756ポイント。

今の霞榎なら、ルイスとでも互角の戦いができる筈です」

「なるほど……」

「ついでに言ってしまうえば、今の蓮見さんなら昔のオレでも倒せませよ」

これは完全な皮肉だった。

蓮見は、ある封印術を行使したせいで、今は200ポイントほどしか持っていない。

蓮見は顔を変えないで照準を変えて言った。

「今度、戦闘力を測らせてくれない？」

「いいですよ」

霞樓は快く引き受けた。

肉料理が運ばれてきた。ウェイターは黒毛和牛のパイ包みといった。

「もうすぐ秋も終わりね…」

蓮見がしみじみと言うので、思わず手を止める。

「あなたたちを見てみると、私も恋をしていた時代があつたの思
い出すわ」

【レヴァンス】のヒットマンたちは、ボスの恋人は【ANCHOR】
の相川京哉あいかわきょうげ 【ANCHOR】の現在のボス だと確信を
持っていた。

今、彼女が想っているのは彼のことだろうか？

その時、霞榎の携帯端末が声を上げた。

「すみません」

霞榎は端末を持って席を立った。遠くで、僅かに声が聞こえる。

「松沢隆哉」

「はい」

いきなり名前を呼ばれてびっくりした。

「本当のことを言うと、あなたと霞榎ちゃんの力が今の【レヴァン
ス】にほしい。どうかしら？」

どうかしら？というのは、もう一度ヒットマンにならないか、とい
うことだろう。それも霞榎を巻き込んで。

でも、答えは決まっていた。

「もう嫌です。Waltz of Pistolなんて御免です。
もっとも、オレがどうかしていた。

小さいころから黒世界にどっぷり浸かって、何人の命を消した？ど
れだけの体を傷つけた？黒世界どこるか白世界にもどれだけの被害
を与えた？」

父母がヒットマンだったから、8歳で【アポリア】に入る前にも、

ヒットマンの養成は受けていた。その訓練が始まったのは4歳のころだ。

「霞榎にも、これ以上人を殺めてほしくない。」

これ以上、他人の地で自分の手を穢してほしくない……」

最後の仕事以来、ベッドで動けなくて、只管考えていた。

今まで殺した人間の顔を一から思い出す時間もあつた。

…全員が、隆哉を、七海隆也を憎んでいた。恨んでいた。

「…わかつたわ。」

最初から、YESと言う訳がないと分かっていた「

黙って俯いた隆哉を見て、蓮見は諦めたように言った。

「今の日本のヒットマンのトップ・バトル・パワーは、5961ポ

イント。6000ポイント台がないのが現状です。」

このままでは<DIAMOND>も勢力を保てないと思うの。」

一縷の望みだったのだけれど……」

沈んだ空気の中、霞榎が帰ってきた。

「あまり、良い結果は出なかったのですね……」

「待つてなくてもよかつたのに」

「キリの良いところで…」と思つて」

盗聴されていることも、それに気づかれていることも分かっていた。

「そつえば、2人は結婚する気あるの？」

「は？」

霞榎が席について、食事が再開されてから、蓮見が明るい声色で話し始めた。

「する気があるから、楠木の親にあいさつしようと思つて探しているのかも…とか考えてて」

「いえ、そんな風には考えてません。」

オレの親もいないし、結婚するときは勝手にします」

「その時は、私には言いなさいね」

「…はい」

なんで今さら、白世界での生活について、元所属殺屋のボスに言わ

なぎゃけないんだ、まったく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1510y/>

Waltz of Pistol ~ 銀の覇者 ~

2011年11月7日13時01分発行